

4

勘当貴族^なオレの

クズギフト

が

強すぎる!

X¹⁰⁰のランクだと思ってたギフトは、
オレだけ使える無敵の能力でした

Yuzuru Akashiratama

赤白玉ゆずる

illust.

蓮禾

★リオン★

海の上の孤島に住まう
魔人族の巫女。

★レム★

リュークが作った
人間そっくりのゴーレム。

★グリムラーゼ★

アルマカイン王国の王女。
リュークに命を救われた。

★サキヤ★

王国精鋭の忍び集團の
リーダーを務めるくノ一。

★ロウエル★

SSランク冒険者で
気難しい性格のエルフ。

★リュークのチームメイト★



ジーナ



キスティー



ユフィオ

★アニス★

最年少でSランクに
なった剣術の天才少女。

★リューク★

本作の主人公。
Xランクのギフト「スマホ」を
授かり養父に勘当される。

第一章 目指せ大団円

1. ギルド長フォーレント

孤児だったオレは、幼少時に辺境のハイゼンバーグ侯爵ゲスニクに引き取られ、そして魔法の力で洗脳されてしまう。それからというものずっと酷い扱いを受ける毎日だったが、Xランクギフト『スマホ』を授かったことで人生が一変した。バツランクとバカにされた『スマホ』には、最強の能力が秘められていたからだ。

侯爵家を勘当かたどちされたあと、オレはゲスニクの部下ドラグレスに殺されそうになり、すんでのところを天才剣士アニスに救われる。その後『スマホ』の力で大きく成長したオレは、女性冒険者ジーナたちやグリムラーゼ王女、王都特殊任務部隊のサクヤと出会い、アルマカイン王国の危機を救った。

だがちょうどその頃、アニスはダンジョンで行方不明になっていた。

オレは自分で作り出した魔導人形ゴレムのレム、頼もしいAランク冒険者のザックたちとともにダンジョンに突入し、なんとかアニスを救うことに成功する。そしてオレとアニスはお互いの気持ちを

告白し、恋人の関係になった。

アルマカイン王国に極秘で攻め込もうとしていたレグナザードの將軍たちも返り討ちにし、残る課題はゲスニクに支配された領民を救うことだけ。母国に帰るアニスと別れたオレとレムは、侯爵領の街へ向かうのだった。

ゲスニクの街に向かって移動するオレとレムだが、今までレムを乗せていた駿馬^{しゅんめ}アレイオンはアニスに貸してしまったため、レムは馬から下りて自分で走っている。アニスが乗っていた馬は一応いるが、骨格がアダマタイトでできているレムは体重が二百キロほどあるため、普通の馬には乗れないからだ。

レムを乗せて走っていたアレイオンは、やっぱり凄かったのだと改めて感心する。

あいつなら、アニスを無事に故郷へ連れていってくれるだろう。

ちなみに、屈強なゴーレムであるレムは、走る速度は馬を超えるうえ疲れ知らずなため、涼しい顔でオレの乗る馬と併走している。

すっかり暗くなったので、今日の移動は終了して野営することに。

休みなしで一晩中走れば街に着くのも早くなるが、オレはまだダンジョンでの疲労が抜けきっていないので、今夜もしっかり睡眠を取りたかった。まあ急いで向かったとしても、街を救うための具体的な案を思いついてないしな。焦らずに行動したほうがいいだろう。

レムは食事が不要なので、オレだけ晩飯を食べていると、レムがぼそりと呟いた^{つぶや}。

「マスター、アニス様とのキスはどうでしたか？」

「ブーーーーーッ！」

オレは思わず口に入れていたモノを噴き出した。

「お、お、おまつ、見たたのかっ!? いくらなんでも悪趣味だぞ！」

「いえ、そんな無粋なことなどいたしません。カマをかけてみただけです。なるほど、ちゃんとキスできたようで安心しました。女性に対して不器用なマスターにしては頑張りましたね」

ぐぬうううう……ゴーレムのくせに、主人をからかいやがって……!!

まあレムの気遣いには感謝してるが。レムがその場を外してくれなかったら、アニスとの幸福なひとときはなかったしな。

動揺している姿を見られると悔しいので、オレは目一杯冷静を装いながら食事を再開すると、レムがニヤニヤと笑いながらまた口を開いた。

「でもマスターのファーストキスはワタシですからね。今のところワタシがリードと言ってもいいでしょう。アニス様がいないうちにマスターと既成事実を作ってしまったえば、ワタシの勝ちです」

「言っておくが、また夜中に襲ってきたりするなよ？ 次はもう許さんぞ」

「承知しました。今後はマスターから襲ってもらえるように頑張ります」

レムはそう言いながらにつきり微笑む。うゝ頭痛い。

ただ、レムのおかげでアニスは助かったから、もちろん感謝の気持ちは忘れてない。だが、こいつは何考えてるか分からないところがあるんで、いつか変な暴走しそうで怖いぞ。

そもそもオレのファーストキスはレムじゃなくてサクヤなんだけどな。まあそんなこと教えないけど。

宣言通り、その夜レムはオレを襲うことはなく、翌日またオレたちは移動を開始した。アニスが乗っていた馬も連れて走ったため、思ったよりも時間がかかってしまつて、オレたちがゲスニクの街に着いたのは夜になった。

入り口の門を通ろうとしたところで、オレは見知った門番に話しかけられた。

「ああリユーク、やつと帰ってきたな。冒険者ギルド長のフォーレントがお前に用があると云っていたから、今から行ってこい」

「フォーレントが？ いったいオレになんの用だ？」

すでにザックたちは帰ってきていて、ダンジョンでの出来事やバーダンたちSランク冒険者がレグナザードの將軍に殺されたことなどを報告してるとは思うが、『霸王の卵』については話してないはずだ。とすると、オレに聞くようなことなんて特にないはずで、フォーレントがオレになんの用があるのか見当も付かないが……

「もう夜だし、こんな時間じゃギルドに誰も残ってないだろ？ 行くのは明日でいいかな？」

今はフォーレントに会いたくないので、明日にしてもらえないか門番に確認した。

フォーレントには嫌われているし、会えば面倒事が発生しそうな気がするからな。

この街をどうやって救うか、現在頭を悩ませている状態だ。帰ってきたばかりなのに、これ以上悩みの種は増やしたくない。これからの行動には気を付けなくちゃいけないし、せめて今夜一晩落ち着いて考える時間がほしいところ。

「いや、お前が帰り次第、会いたいとのことだった。フォーレントにはこちらから連絡しておくから、とにかくすぐに行け」

そんなに緊急の用事なのか？ 会いたくはないが、無視すると事態が悪化するかもな……

仕方ない、気は進まないが行くとするか。

「分かった。ギルドに行つてくるよ」

オレは門番にそう返事をし、冒険者ギルドへ向かった。

ギルドに着くと、一応入り口こそ開いていたが、照明などは消えていて人の気配はなかった。職員も帰っているみたいだし、本当にフォーレントは待っているのか？

『スマホ』で確認してみると、確かに一人残っていることは探知できた。位置的にもギルド長室みたいだし、上位冒険者クラスの力も持っている。多分これがフォーレントだろう。

まあ元Sランク冒険者であるフォーレントと似たレベルの人間はギルドには複数いるから、実際に行つてみないことには分からないが。

「レム、お前はここで待っていてくれ」

「了解しました。マスターなら問題ないかと思いますが、一応ご注意くださいませ」

レムを連れていくと余計なトラブルを起こすかもしれないので、ここで待たせることにした。

何か問題が起こったとき、オレ一人で対処したほうが穏便に収まりそうだからな。

オレはギルドの建物内に入り、照明をつけたあと、周囲を窺いながらギルド長室まで歩いていく。

『暗視』スキルがあるから真つ暗でも問題ないが、明るいに越したことはない。

そのままギルド長室前に到着し、扉を軽くノックした。

しかし、何も反応はなく、辺りはしんと静まりかえったまま。

「……フォールント、オレに用があると聞いたんだが？」

オレを呼びつけたくせに、話しかけても何故か返事がない。誰かがいる気配はもちろんある。

「フォールント、入るぞー？」

仕方なく一声かけてから扉を開けると、いきなりオレの心臓目掛けて剣が鋭く突き出された。そ

れは非常に素早く精密で、たとえSランク冒険者でも避けられそうもない攻撃だったが、オレは軽

くその剣先を掴んで受け止める。襲ってきたのはフォールントだった。

「どういうつもりだ、フォールント？」

「バカなつ、極上工芸品の魔導具で気配を消して襲ったのだぞ!? このタイミングで気付かれるな

ど信じられん!？」

オレの暗殺に失敗したフォールントが驚きの声を上げる。確かに上手に気配を消していたが、

『スマホ』で探知済みだし、オレ自身もこの気配はキツチリ探知できていた。

ただ、何故フォールントが気配を消そうとしていたのかが不思議だった。

オレを呼びつけたあと、何かの理由で会いたくなくなつて居留守を使つたのかとも考えたが、ま

さかオレを殺そうとしていたとは……

そこまでオレの存在が邪魔だったというのか？ いや、もしかして……!

「フォールント、オレを殺すようにゲスニクから命令されたのか？ そうだとしたらやめておけ。

ゲスニクは近いうちにオレが倒す。お前はもう汚い仕事からは足を洗うんだ」

「何を偉そうに……お前を殺さねば、ゲスニク様にオレが殺されるのだ!」

フォールントはぶるぶると全身を震わせながら、剣を持つ腕に力を込める。

オレの推察通り、ゲスニクに脅されてオレを狙つたつてことか。

「だから、ゲスニクについてはオレに任せろつて!」

「くだいっ! オレはもうあとには引けん! お前を殺さぬ限り、オレは終わりだ」

確かに、オレがゲスニクを倒したところで、フォールントがやってきた悪事は消えないしな。

ゲスニクとフォールントはもはや一蓮托生の間柄ともいえる。

説得しても無駄なら、フォールントも倒すしかない。ただ、ギルド長をここで痛めつけたら、あ

とあと面倒になるか？ さて、どうする？

オレが悩んでいると、刺し殺すのは無理と悟ったフォーレントが剣から手を離し、懐から黒く光る何かを取り出した。

「ゲスニク様からいただいた『闇鎖の封牢』だ！これを喰らえば、さすがのお前も自由には動けん！」

「なんだって!? ちょっと待て、フォーレント！」

ゲスニクからもらった、という言葉が聞き捨てならず、オレはとっさに叫んだ。しかし、オレの忠告を無視して、フォーレントは『闇鎖の封牢』というアイテムをオレに投げつけた。

その直後……

「ぐああああっ、な……なんだコレ……は……!？」

『闇鎖の封牢』はオレに届く前に空中で爆発し、黒い刃を大量に飛び散らせた。

アイテムの正体が闇属性のものということには気付いたので、避けるまでもなくオレには無効だったが、フォーレントは全身に黒い刃を浴びてしまう。

「ぐうっ……くそっ、お、おのれゲスニク、オレを騙しやがったな……」

「フォーレントっ!? 『超回復』っ!」

崩れ落ちるフォーレントに、オレは『スマホ』に詠唱登録していた回復魔法を無詠唱で放つ。しかし、黒い刃が首や心臓に突き刺さってフォーレントはほぼ即死だったため、残念ながら間に合わなかった。

フォーレントの言葉から察するに、本来の『闇鎖の封牢』は対象者を捕らえる効果があるアイテムだったんだろう。だが実際に渡されたのは『闇鎖の封牢』ではなく、周囲にいる者を無差別に殺傷するアイテムだった。

ゲスニクのヤツめ、オレとフォーレントをまとめて殺そうとしたってことか……

フォーレントはあれほどゲスニクに尽くしてきたのに、不要となったらあっさり捨て駒にするなんて、本当にクズだな。何はともあれ、この現状をどうするか……?

オレが思考を巡らせていると、この場に近付く人の気配に気付いた。

いつの間にかこの建物に入ってきた人がいたのか！正面入り口にはレムがいるから、恐らく職員専用の裏口を利用したんだろうが、いったい誰だ!?

目まぐるしく変化する状況にオレが戸惑っていると、その人物がギルド長室に現れた。

「フォーレント殿、侯爵が至急お屋敷まで来てほしいとの……なっ、これはいったい!？」

現れたのは、このゲスニク領を査察していたノモス監査官だった。

2. ゲスニクの計画とリユークの計画

「おいリユーク、久々に会えたと思ったら、いったい何があったんだよ……」

ユフィオが疲れたような表情で、牢獄ラウにいるオレに問いかける。その隣にはもちろんジーナとキスティもいて、ほかにはザックたちAランク冒険者やレムもここに来ている。

そう、今オレは手錠をはめられ、街に設置されている地下牢に入れられているのだった。つまり、現在オレたちは鉄格子を挟んで会話している。

王都で別れたジーナ、ユフィオ、キスティたちは、すでにこの街に到着してオレの帰りを待っていたが、オレはアニスと一緒にユードイス王国へ向かうことになってしまった。それについてザックに伝言を頼んでおいたので、ジーナたちは今後どうしようか検討していたらしいが、そんなとき昨夜オレが衛兵に逮捕されたと聞きつけこの牢獄まで面会に来たとのこと。

同じようにザックたちも駆けつけ、こんな形での再会になって呆然と立ち尽くしている状態だ。ザックはため息を一つついたあと、呆れ顔で言った。

「はあ、これはどういうことなんだリユーク？ アニスの国へ行くと言ってたのに街に帰ってきて、そのうえギルド長殺しの容疑がお前にかかっているなんて、きっちり説明してほしいぜ」

「まったくです。本当にマスターは迂闊うかつで困ります。こんなことになるなら、やはりワタシも一緒にギルドの中に入るべきでした」

またしても失態を犯したオレに、レムも苦言を呈する。ただ、この状況にみんな驚いてはいるものの、全員オレの心配はしてないらしい。とにかく、何故こんなことになったのか、詳しい経緯いきまつを聞きたいようだ。

ひと息ついたところで、これまでのことを掻い摘つまんでみんなに話す。

昨夜フォーレントに襲われたオレだが、ゲスニクに騙されたフォーレントは魔導アイテムによって死んでしまい、そしてその現場にちょうどノモス監査官が現れた。

どうやらゲスニクに指示されてフォーレントを呼びに来たらしいが、もちろん偶然じゃないだろう。最初から計画通りの流れだったに違いない。

計ったようなタイミングで、ゲスニクの手下である衛兵が駆けつけてきたからな。

オレとフォーレントをまとめて始末する罠を仕掛け、仮にオレを仕留め損なっても、ノモスさんに現場を見せることでオレをギルド長殺しの犯人に仕立て上げることができる……というわけだ。

ただ、ノモスさんはグルじゃないだろう。

侯爵のゲスニクといえど、王都直属の監査官を抱き込むのは難しい。アルマカイン王国領を査察する任務に、簡単に不正をするような人物は選ばれないからだ。

よって、ノモスさんは利用されただけに違いない。

とにかく、現行犯として捕まったオレは、有無を言わずこの牢獄に入れられてしまった。そして、オレが殺人の罪で投獄されたと聞いて、ジーナやザックたちがすっ飛んできたのがこの状況である。

経緯を知ると、ようやくみんなは納得しようだった。

「……なるほど、状況は理解したわ。アンタのことだから、やっぱり心配する必要はないみたいね。

それはいいとして、この女の子は誰？」

オレの説明が終わったあと、黙ってじつと聞いていたジーナがレムを指さして質問する。

「ああ、あたかも気になって仕方なかったぜ。『劍姫』アニスにやたら似てるし、お前とも親密にしているみたいだし、どう見ても普通の関係じゃないだろ！」

ユフィオも、不満を隠さない表情でオレを問いただした。

ジーナたちとレムは初対面だから、ちゃんと説明しないとな。

……とオレが思ったところで、キステイーがハツとして叫んだ。

「もしかして、アニスさんにフラれちゃったから、似ている女の子を口説いたの？ そんなのダメよ！ フラれたら私たちと付き合うって約束だったでしょ!？」

「ええっ!? そんな約束してたっけ!? そもそもオレはフラれてなんか……」

「その通りです。マスターはアニス様にフラれたからワタシを選んだのです。そういうわけで、皆さんもマスターのことは諦めてください」

「ウソを言うなレム！ ちよ、ちよと待てみんな、なんで泣く……!？」

ジーナたち三人がいきなり涙を流し始めたので、オレは慌ててその場を取り繕おうとする。

「リユークのことはアタシたちが先に好きだったのに、ずるいっつ！ わあああん」

「待って、ジーナ待ってば！ お、おいザック、助けてくれっつ！」

ザックたちがニヤニヤと見守る中、混乱がしばらく続いたが、ようやく収まってきたのでレムの

ことを説明した。ザックたちが見ている手前、レムがゴーレムだということは隠したが、一応ジーナたちは納得してくれたようだった。

ただし、オレとアニスのことも伝えたので、ジーナたちは複雑な表情をしている。

しばしの後に、冷静になったジーナが口を開いた。

「そう……『劍姫』アニス・メイナードと両想いになっちゃったのね。『劍姫』は男嫌いという噂だったから安心してただけだなあ……」

「だよな。絶対フラれると思ったのに……。まあとりあえず、おめでどうと言っておくけどさ」

ユフィオが口を尖らせながら、一応祝福してくれる。

そのとき、キステイーがとんでもない提案をしてきた。

「でもねリユーク、世界には一夫多妻が普通の国もあるのよ？ だから、アニスさんがいても、私たちと結婚できないわけじゃないの。みんなでそこに行つて結婚すればいいわ！」

「その通りだわ！ さすがキステイー、冴えてるわね！」

「よっしゃリユーク、みんなで重婚OKの国に行つて結婚しようぜ！」

「なるほど、それはワタシも思いつきませんでした。素晴らしいアイデアです。これなら全員が幸せになれますよマスター！」

ジーナとユフィオに続き、レムまでキステイーの提案に賛成している。

いや、頼むから、もう少しアニスの気持ちも考えてくれよ……

この先が思いやられる感じで、どっと疲労を感じるオレ。
一通り落ち着いたところで、ザックが話を再開した。

「将来について意見がまとまって良かったじゃないカリューク。それで話を戻すが、なんでおとなしく捕まってるんだ？ こんな牢獄なんて、お前なら簡単に抜け出せるはず。ここにいるのは、何か考えがあるんだろ？」

「まあね。オレとしては、これはチャンスだと思ってるんだ」

「チャンス？ どういうことだ……？」

「それは……」

と、オレが説明しようとしたとき、誰かがこの地下に入ってきた。

全員が注目する中、現れたのはゲスニクとその側近ドラグレスだった。

ゲスニクは今回の事態の元凶とはいえ、この領地を統治している侯爵だ。安易に逆らっていい相手ではなく、さすがのジーナやザックたちも慎重に身構えた。

「なんだ此奴らは!? 下賤なクズどもがぞろぞろと集まりおつて、鬱陶しいことこの上ない。ええいリューク、このアバズレ女たちはお前が呼んだ娼婦か!？」

こんな場所に大勢がいることにゲスニクは驚き、怒声を上げた。

「おい親父、失礼なこと言うなよ！ 彼らは優秀な冒険者だし、彼女たちはオレが世話になってるチームのメンバーだ」

みんなに対するフォローを入れつつ答えたが、短気なジーナはカチンときたようで、すかさず言い返す。

「あら、リュークが相手なら娼婦と呼ばれてもアタシは構わないわ。アンタみたいな中年デブのハゲ親父は、どんなにお金をもらっても絶対にお断りだけどね」

このキレ気味の発言に、ユフィオとキスティーがうんうんと頷く。あ、レムもだ。

一応相手は侯爵なんだから、そういう挑発するなつてば……

「ふん、しょせん低俗な女たちよ。侯爵に対する口の利き方を知らぬと見える。本来ならまとめ牢獄にぶち込んでやるところだが、今のワシはすこぶる機嫌がいい。今回だけは見逃してやろう」

そう言いながらゲスニクはオレのほうに向き直り、下劣な笑みを浮かべた。

「ククク、無様だなりュークよ。思ったより成長したと聞いたが、そうなつてはどうすることもできまい。殺人の罪はしっかり償ってもらおうぞ」

「いや親父、オレは本当にやってないんだつて！ フォーレントは勝手に死んだんだ」

「しばらく会わぬうちに、お前は口が悪くなったな。ワシのことは父上と呼ぶように教えたはずだが、驕を間違ったか？ まあ勘当した今ではどうでもいいことだがな」

驕も何も、魔法でオレを洗脳して好き勝手こき使っていただけだろうに！

当時のオレは、どんなに酷い命令でも笑顔で「ハイ」と答えて従っていた。そのイヤな記憶が改めて蘇って、オレはついムスツとしてしまう。

ゲスニクも同じことを思い出していたのか、オレを見下すように嘲笑ちやうしょうしたあと言葉が続けた。

「お前が何を弁解しようとも、お前の殺人行為はノモスが見ておるから言い逃れなどできぬぞ。ヤツは今、このことを王都へ報告しに行っておる。お前の処分については追って沙汰が来るから、それまでここで楽しみ待つがいい」

そう、ゲスニクが言った通り、今日早朝にノモスさんは王都に向けて出発していた。

ノモスさんはちょうど王都に帰る予定だったので、査察の報告も兼ねてこの事件に対する指示を仰ぎにいったのだ。

ゲスニクはオレの実力について少しは知っていたようで、仮に始末に失敗しても大丈夫なように罫を仕掛けた。ノモスさんを巻き込めば、オレがおとなしくすると思っただろう。

いくらオレが成長したといっても、王都の監査官相手に無茶をするわけにはいかない。その場から逃げたり、または下手なことをすれば、オレは王都からも狙われることになるからな。

ということでおレを上手く罫にはめることができたが、監査官がいる手前、ゲスニクとしてもオレを安易に死刑にはできない。一応、領地の統治権はゲスニクにあるので、普段なら適当な証拠をでっち上げてオレを死刑にしたかもしれないが、査察を気にしてこれ以上強引な手段を取るのには控えたのだろう。

仕方なく、ゲスニクはあえてノモスさんを送り出し、判断は王都に任せることにした。

ギルド長殺しなら、王都もきつと死刑と判断するはず——王都のお墨付すみづきがあれば、堂々とオレ

を処刑できるってところだ。

ゲスニクがこんな計画を思いついたのは、ノモスさんがたまたまこの街に来ていたからだろう。

ノモスさんに感謝だな。

オレとアルマカイン王家との関係を知らないゲスニクは、この計画が上手く進行していると思っているようで、完全に勝ち誇った表情をしている。

「おいウソだろ!? 王都に報告なんてしないでくれ! オレはあなたの息子だったんだぞ、なんとか助けてくれよ! 頼むよ親父!」

オレは過剰ともいえる演技で、狼狽うろたえる姿を見せた。

「ぐはははつ、いい気味だ。理由なくギルド長を殺したのだから、まず死刑だろう。せつかくだから、ワシが自らお前を処刑してやる。それが元父親としての責任というものだからな……行くぞドラグレス」

ゲスニクは言いたいことを言ったあと、上機嫌でこの地下牢をあとにした。

ヤツらの姿が見えなくなつてから、ジーナが納得したという表情で話し始める。

「王都に報告か……なるほど、リユークの考えが分かったわ。あの男をぎゃふんと言わせるような一発逆転が見られそうね」

ほかのみんなもニヤリと意地の悪い笑みを浮かべた。

オレの計画が上手くいけば、無駄な争いをするのではなく、領民を解放できるかもしれない。

オレは期待しながら、王都から通達が来るのを待つことにした。
そして一週間が経った頃……

3. 決着

「お、おいリューク、おおお前を呼んでるお方がいるから、い、今すぐに俺たちと一緒に来い！」
昼食後、地下の牢獄でのんびりしていたところに衛兵たちが大慌てでやって来て、牢の錠を開けてオレを外に出す。そして衛兵に促されるまま地上に出ると、立派な装備を着けた大勢の騎士たちが、街の通りを埋め尽くすように整列していた。

彼らは……アルマカイン王都にいるはずの王国の騎士団だ！

ちよつと待て、さすがに全軍というわけじゃないだろうが、凄い人数が来ているぞ!? 少し離れたところに監査官ノモスさんの姿も見える。それどころか、ゾンダール將軍までいるじゃないか！
あつ、グリムラーゼ王女の馬車もあそこにあるということは、王女も多分来ているだろう。ちなみに、ジーナやザックたちの姿も騎士団の奥に見える。

地方の殺人事件程度で、なんで国家の一大事みたいな騒ぎになってるんだ？

確かにオレは王都からの吉報を待っていたが、こんな事態になることは想定してなかった。今回

の事件に対する、王都の見解を報せてくれる程度と考えていたのに……

ゲスニクの私兵である衛兵たちはならず者ばかりだが、この状況にはさすがに怖じ気づいてるよ
うだ。

「リューク様っ！ お会いしたかったですわ！」

馬車に乗っていたグリムラーゼ王女が、オレを見つけて満面の笑みで駆け寄ってきた。

そしてオレの腕の手錠に気付き、心配そうな声を上げる。

「ああつ、そんな手錠をはめられて……！ 誰か、リューク様の手錠を外して差し上げて！」

「お久しぶりです、グリムラーゼ王女様。手錠のことは大丈夫なので気にしないでください」

オレが王女に挨拶していると、続いて馬車から降りた王女専属護衛のヒミカさんとその妹である『天狼七部衆』のサクヤが、揃ってこっちに近付いてきた。

「へへっ、久しぶりだなリューク」

サクヤがイタズラっぽく笑いながら鼻の頭をこする。

「サクヤまで来ていたのか……みんなに会えたのは嬉しいけど、王都を守る人たちがこんなに来ちゃって、王様は大丈夫なの？」

王都の戦力が大勢来てしまったので、王都の警備がどうなっているのか心配でそう訊ねると、王女は驚きの返答をした。

「あらリューク様、お父様も来てますわよ」



「ええっ、王様まで来てるの!？」

……ホントだ！ ビックリしながら注意深く見回すと、ひととき豪華な馬車が奥にあった。こりゃ大変なことになっちまったぞ！ 王都がオレの状況を知ったら、きっと何か手を打ってくれると思っていたが、まさか王様まで巻き込んだんじゃったとは……！

オレの計画が他力本願だったことはもちろん自覚してたけど、ここまで大ごとになるとは想定してなかった。こんな辺境に大勢を呼んじゃって、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

オレが驚いていると、ゾンダール將軍とノモスさんがゆっくりとこっちに歩いてきた。

「リユークよ、ノモス監査官から報告は聞いておる。おぬしがくだらぬことに巻き込まれておるようだから、何か力になってやろうと思いやつて来た。当初はワシの部隊のみで来る予定だったのだが、グリムラーゼ殿下が話を聞きつけなさったらしくな。すると、クラヴィス陛下まで同行すると仰ったので、このような大部隊になったというわけだ」

「すみません將軍。今回のことでちよっとお力添えいただければと、軽い気持ちで考えてしまったんですが、まさかこんなことになるなんて……本当に申し訳ありません」

「気にせんでよい。実は陛下は羽を伸ばしたかったらしく、城を出る理由ができて喜んでおられるようだ。それに、アルマカイン侵略に動いていたレグナザード軍が、この近くで撃退されたという話も耳にした。それはおぬしがやったのだらう?」

「ああ……はい。なんとか追いつ返すことができました」

当然ではあるが、レグナザード軍が撤退したことは、すでに王都にも情報が届いているようだ。ちなみに、今のところレグナザード軍はおとなしくしている。四將軍たちを手酷く返り討ちにしたので、恐らくもう侵略してこないとは思うが、警戒は怠らずにいたほうがいいだろう。

そんなことを將軍と話していると、ゲスニクの私兵たちがバタバタと慌ただしく行き交い始め、そして奥から血相を変えたゲスニクが姿を現した。兵士から報告を聞いて飛んできたんだろう。側近のドラグレスとその女のゼナも、すぐ後ろから付いてきている。

ゲスニクは將軍の前まで来ると、青ざめながら言葉を発した。

「これはゾンダール將軍、長らくご無沙汰をしておりますして大変失礼いたしました。このような辺境の地に、王都軍の皆様どころかクラヴィス陛下までいらっしゃった理由はなんでしょう？」

「侯爵殿の領地でこのリュークが殺人を犯したと聞き、ワシと陛下は真実を確かめに来たのだ。リュークが殺人を犯したなど信じられぬからな」

將軍は厳しい顔つきでゲスニクに答えた。

予想外の返答を聞いたゲスニクは、わけが分からないまま慌てふためいている。

「な、な、何故リュークごときのために、そんなことを……」

「知らぬのか？ リュークはグリムラーゼ殿下とクラヴィス陛下のお命を救ったのだぞ？ このワシもリュークのおかげで命拾いをしておる」

「リュ、リュ、リュークがっ!? まさか!? 其奴にそんな力などあるわけ……」

ゲスニクは信じられないといった目でオレを見つめる。

あまりに現実離れた状況なので、だいぶ混乱しているみたいだな。

「侯爵殿はワシの言うことが信じられぬと見える。ならば、その男……確か侯爵領軍の総長ドラグレスだったか？ このリュークと戦ってみよ」

「オレが……リュークと戦う？」

突然將軍に指名されたドラグレスは、この妙な成り行きに戸惑いを隠せず、眉をひそめている。

「そうだ。もしもおぬしが勝てば、リュークはワシの見込み違いということで、ワシらはこのまま何もせずに王都へ引き返す。リュークのこともおぬしたちが好きに裁けばよい。リューク、それでいいか？」

ゾンダール將軍がオレに確認を取る。

「オレは別に構いません。なんなら、この手錠をはめたまま戦ってもいいですよ」

「なんだと!? 貴様頭がおかしくなったのか？ ならばオレは、両手を使わずに戦ってやる!」

オレの挑発に憤慨したドラグレスが、さらに不利な条件を提案して張り合ってきた。

相変わらず負けず嫌いな。

「遠慮するなドラグレス。オレは手錠のまま素手で戦うから、剣でもなんでも使ってオレを殺しに来いよ。せっかくだからゼナも一緒に相手してやろうか？」

ドラグレスの隣で、緊張した面持ちでこのやり取りを見ているゼナにも声をかける。

「ま、待つて……お待ちくださいゾンダール將軍！ リュークが強いのは分かりました。で、ですが、だからといってリュークの殺人の罪は消えませぬ！」

往生際が悪い男、ゲスニクだ。さすがというか、そう簡単にはへこたれない根性を持っている。なんとしてもオレの口封じをしたいみたいだな。

「リュークが冒険者ギルド長のフォーレントを殺したのは事実です。現場をノモス監査官が見ておりますし、フォーレントが死亡したのはその直前だったことも確認済みです。そ、そうであるな、ノモス監査官？」

「はい。リューク殿が何をしたのかは見ておりませんが、私が到着したとき、確かにフォーレント殿は亡くなられた直後の状態でしたし、リューク殿以外には誰もいませんでした」

ゾンダール將軍の隣にいるノモスさんにゲスニクが証言を求め、ノモスさんがそれに答える。

「おおノモス殿、同意していただきかたじけない。状況はこの通りですし、フォーレントには自殺の兆候もありませんでした。どう考えてもリューク以外に犯人がいるとは思えませ……」

「見苦しいぞ、ゲスニク・ハイゼンバーク侯爵」

張り詰めた空気を破って、重厚な声がビリリとその場に響き渡る。

ゲスニクの言い訳を一喝したのは、アルマカイン国王クラヴィス陛下だった。

いつの間にか馬車から降りていたようで、鋭い目でゲスニクを凝視しながらゆっくりとこちらに近付いてきた。王様が発するオーラの迫力に、さすがのゲスニクも縮み上がる。

「ク、ク、クラヴィス陛下、これは、その……あああ」

「リューク殿はアルマカインの救世主だ。よって、たとえ殺人を行おうとも余が無罪にしてやってもよいが、ここの自治権を持つそなたは納得せんだろう？ ヒミカよ、アレを用意せよ」

「へ、陛下、何を……？」

ゲスニクが驚きの表情で見守る中、ヒミカさんは台座を用意して、その上に手のひらサイズの透明な玉を置いた。そして準備が整ったところで、ヒミカさんが説明を始める。

「これは我がアルマカインに伝わる秘宝『真実の宝玉』。宝玉に手を置いて話すことで、その内容が真実かどうかを見抜くことができます。言葉にウソがなければ宝玉は青く輝き、もしも偽りなら赤く輝くでしょう」

「ハイゼンバーク侯爵、この宝玉をもってそなたの言葉を証明してみせよ。その前に、まずはリューク殿の無実から証明したほうがよいかな？」

王様がオレを見てニヤリと微笑む。

「分かりました。では、どうなるかご覧ください」

オレは王様の意図を汲み、台座の前まで進んで宝玉に手を置く。

「ではリューク殿に質問いたします。あなたは冒険者ギルド長フォーレントを殺害しましたか？」

「いいえ」

ヒミカさんの問いにオレがそう答えると、宝玉は青く輝いた。

「宝玉により、リユーク殿の言葉にウソがないことが証明されました。次はハイゼンバーク侯爵、あなたの番です」

「は、は、はひっ」

ヒミカさんに促され、今度はゲスニクが前に出て宝玉に手を置く。

その呼吸は喘鳴のように荒く、顔面は蒼白で、額からは大量の汗が噴き出ていた。

「ハイゼンバーク侯爵、あなたはフォーレント殺害にはいっさい関与していませんね？」

「は……………はい！」

ゲスニクが目を閉じながら祈るように回答すると、宝玉は赤く輝いたのだった。

それを見たゲスニクは、全身を大きく震わせながら崩れ落ち、土下座する。

「お、お、お待ちください！ 確かにフォーレントの殺害に少し関わってしまいましたが、計画したのは私ではなく……………」

「それでもまだ認めぬか？ おぬしたちの悪行は全て把握しておる。サクヤ、調査報告書を読み上げよ」

「はっ！ ハイゼンバーク侯爵、貴殿について王都特務隊『天狼七部衆』が調べ上げた罪状を読み上げる。一つ……………」

ゾンダール將軍に指示され、サクヤが前に出て罪状を一つずつ述べていく。それは、この短期間でよくぞ調べたというもので、オレが知らない犯罪もたくさんあった。

今回のことで、サクヤたちが尽力してくれたんだろう。

ドラグレスやゼナについても調べ上げていて、素性も完全にバレている。ドラグレスが元Sランク冒険者だったことや、大規模な山賊団の頭領として暴れ回っていたことまで調査済みだった。

ちなみに、『ドラグレス』は偽名で、本名は『ドルグ』というらしい。

サクヤが全てを読み終えると、ゲスニクはついに観念した。

「も……………申し訳ありません。せめて、せめて死刑だけはお赦しを……………」

『真実の宝玉』を使うまでもなく、ゲスニクは全ての罪を認めた。

もはや言い逃れは不可能と知って、少しでも処罰を軽くしてもらおうと考えたのだろう。額を地面につけながら、必死に命乞いをする。

「そなたがしたことは死罪に値するが、一応リユーク殿を育てた功績もある。それに免じて、極刑にはしないで置いてやろう。まあ当然だが、爵位剥奪と牢獄暮らしは覚悟しておけ」

「ははっ、へ、陛下の寛大なご処置に感謝いたしますう！」

死刑だけは勘弁してやるという王様の言葉を聞いて、ゲスニクは安堵の息を漏らした。そしてゲスニクが侯爵の地位を失ったことで、このハイゼンバーク侯爵領は無事解放されたのだった。

☆

冒険者ギルド長殺害事件について、ゲスニクは王都で厳しく裁かれるようだ。ドラグレスやゼナ、そして侯爵領の兵士たちも多くの罪を犯しているので、全員王都へ連れていくことになった。

とりあえず、王様やゾンダール將軍たちはこの侯爵領で一泊したあと、翌朝に王都へ向けて出発する予定だ。わざわざこんな辺境の地まで来てくれたのに、あまりゆっくりできないのは残念だが、忙しい人たちだから仕方ない。

王都軍の騎士たちが作業をする中、レムやジーナ、ザックたちもオレのもとに集まり、グリムラーゼ王女やヒミカさん、サクヤも含めて無事を確かめあった。

無事アニスも領民も救うことができた。これで本当に全てが終わったので、これからは心置きなくみんなと一緒に生活できる。この侯爵領については、今後は優秀な人が統治してくれるだろう。

オレたちが談笑していると、騎士たちに指示を出し終えたゾンダール將軍と王様がやって来た。ゲスニクを逮捕するに至ってバタバタと慌ただしい状況になり、つい言いそびれてしまったので、オレは王様と將軍に感謝とお詫びの言葉を伝える。

「クラヴィス陛下、ゾンダール將軍、このたびは本当にありがとうございます。今回は陛下の力に甘えることになってしまい申し訳ありません。思いつきの計画でしたが、まさか陛下まで来られるなんて、我ながら浅慮すぎました」

「よいよい。楽しい旅であった。それより、余はつくづくダメな王だ。メルディナたちに一杯食わされ、ハイゼンバークのような悪徳領主をのさばらせておったとは……すまぬリューク殿」

王様が申し訳なさそうに、オレに頭を下げる。

「頭を上げてください陛下、ゲスニクは狡猾なヤツだったんで、気付かなくても仕方ありません」

「そう言ってくれるなら余は気が楽になる。その詫びというわけではないが、リューク殿、この侯爵領に新しい国を作らぬか？」

「新しい国……？ どういうことですか？」

王様の言葉にオレは首を傾げる。

「この侯爵領はアルマカインに属する領土で、その自治権をハイゼンバークに与えていたわけだが、この領地の所有権をリューク殿に譲渡する。リューク殿には、この地で建国してもらいたい……つまり、国王となってほしいのだ。そなたなら立派な君主となるだろう」

「えっ………はいっ!？」

オレは最初王様が何を言ってるのか分からず、しばらく考えてから理解して驚きの声を上げた。

……オレが国王!? ゲスニクが賜っていた『侯爵』という地位ですら、オレには荷が重いのに、国王なんて絶対に無理だ。そんなの考えたことすらない。

「実は余がここまで来たのも、このことについてリューク殿に直々に伝えたかったからなのだ。どうだね、リューク殿？」

「いや、自分のことをそこまで信頼してくださるのは光栄ですが、国王になるなんて無理です！絶対務まりません！」

オレは過去にないほど狼狽し、慌てて辞退する。しかし……

「いいじゃないかリユーク、王様になっちゃえよ！」

「そうよ、凄いチャンスだわ！ リユークが国を持つなんて、夢みたい！」

「陛下がこまで言ってくださったのに、そのご厚意を無駄にしちゃいけないわ！」

「国王なら自分で法を決められますよマスター！ 一夫多妻も自由です！」

ユフィオ、ジーナ、キステイー、レムが、自分のことのようにはしゃぐ。

いや、絶対無理だつて！

「リユーク殿、余がこんなことを提案したのは、実のところそなたの扱いに困っておるからだ。リユーク殿の力は一国に値する。そのような力がアルマカインにあると、内外から妬み嫉みが生まれるだろう。謀略に巻き込まれようとする輩もやってくる。余計な争いを避けるためにも、そなたは自分の国を持ったほうがよいと余は判断したのだ」

王様の言ったことを、オレは嘔み碎いてじっくり理解しようとする。……簡単に言えば、オレはアルマカインで持て余される存在になってしまったということか？

オレの力を欲しがるヤツ、またはオレの存在を疎ましく思うヤツが、アルマカインにやってきて問題を起すかもしれない。だから、国王になってアルマカインを出る……と。

国王になれば、オレは権力を持つことができる。つまり、降りかかる火の粉は、その権力を使つてオレ自身で解決してほしいということなのかもな。

「とはいえ、余が認めただけで王になれるわけではない。国王会議に出席して、世界に承認されなくてはならない。その会議にリユーク殿が出席できるよう、余が推薦しよう」

「……すみません、急なことなので、少し考えさせてください」

「もちろんだ。色よい返事を期待しておるぞ」

そう言つて、王様はにこやかに微笑んだ。

国王か……いや、やつぱ無理だろ。オレなんか領土を統治できる気がしない。

「悩むことなんてありませんのに。リユーク様なら、一国の王どころか世界の霸王になれますわ」

「まったくリユークは、誰よりも強いくせに、こういうことには腰抜けだよな。もうちつと度胸がほしいぜ」

満面の笑みで歓喜しているグリムラーゼ王女と、喜びながらも少し呆れているサクヤ。ほかのみんなも浮かれまくつて、好き勝手なことを言っている。

まあなんにせよ、とりあえずこれで一段落だ。今のところ国王になるつもりはないが、せっかくの提案なので、ゆっくり検討することにしよう。

そんなことを考えながら、この大団円の和やかな空気に浸っていると、突如男の声がこの場に響き渡った。

「取り込みすまないが、『霸王の卵』を取ったヤツつてのはここにいるのか？」

全員が声の方向に振り向くと、そこには黒髪の男が立っていたのだった。

4. 黒髪の男

万事解決し、これで一件落着と思っていたところで、謎の男が現れた。男は中肉中背で、一見どこにでもいるような普通の人間だが、あまり見かけたことのない変わったデザインの服を着ていた。そして、なんととってもオレと同じ黒い髪をしている。

当然だが黒髪は非常に珍しいうえ、優秀なギフトを授かると言われていて、オレ自身その言い伝え通りに『スマホ』という貴重なギフトを授かった。だがオレはそれ以外にも、黒髪について気になることをザックたちから聞いていた。

現在、世界の各地で黒髪を持つ人々が出現しているという事実だ。

ザックたちはゲインロードからこの話を聞いたらしいが、ダンジョンクリア後のオレはアニスやゲスニクのことと頭がいつばいだっただんで、すっかりこのことを忘れていた。

謎の力を持つているとのことだったが、まさかオレと同じ『スマホ』だろうか？ もしそうなら敵に回すと非常に厄介な存在だが……

オレはこっそり男を『スマホ』で撮って能力を分析してみた。

……『雷光の勇者』？ おかしな名前前のギフトだ。『勇者』という名称が付くギフトなんて聞い

たことがない。それに、ギフトの優劣を判断するランクがない。こんなのは初めてだ。

一応、『スマホ』じゃなかったことで少し安心したが、いったい何者なんだ？

「おいおい、お前ら全員耳が聞こえねえのか？ もう一度聞かぬ、『霸王の卵』を取ったヤツは誰だ？ いるなら名乗り出る」

「『霸王の卵』なんて実際にはなかったんだ。それより、その話をどこで聞いた？」

ゾンダール將軍を差しおいてオレが出しゃばるのは気が引けたが、『霸王の卵』について聞いているのなら、オレが答えたほうが話は早いだろう。

オレの回答を聞くと、男は首を傾げながら不思議そうな表情になった。

「お前……黒髪ってことは『ニホンジン』だろ？ なんてこんなところにいる？ この世界への転移場所はウインガリア帝国の近くが多かったんだが、こんな僻地へきちに飛ばされたヤツもいたってことか？」

「オレが『ニホンジン』……？ いったいなんのことだ？」

「とぼけるのはよせよ。お前もオレたちと同じ、『地球』で死んでこの世界に転生してきた異世界人だろ？ ここに来てまだ一年も経ってないはずだ」

「『地球』から転生してきただって!? 待つてくれ、オレはこの世界で生まれて、すでに十八年以上過あぎしているぞ」

「なんだって!？」

オレの言葉を聞いて、男は大げさに驚いた。

男の話によると、オレは『ニホンジン』ということらしい。そして彼も『地球』から転生してきたという。

オレは『地球』で死んで転生したことは思い出したんだが、その地球のことはほとんど覚えていない状態だ。『スマホ』についても、うつすらと変な記憶が残っている程度で、本来の使い方を知らない。

オレのルーツは異世界にあるのかもしれないが、目の前の男もオレと同じ存在だということか？ ……いや、オレは間違いなくこの世界で生まれた。ここに来てまだ一年経っていないという彼とは状況が違う。男の驚愕ぶりから考えても、オレは彼らとは違う存在だろう。

ただ、何かしらの関係はあると感じている。同じ黒髪同士、きつと理解し合えるはず。

オレと男の成り行きを静かに見守っているジーナやザックたちだが、いきなり転生だとか異世界人なんて言葉が出てきて驚いている。

みんなにはあとで詳しく説明するとして、今は目の前の男だ。今後の関係を左右するだけに、慎重に対処しなければ……

「そっちの質問には答えた。今度はこっちが聞く番だ。『霸王の卵』についてどこで知ったんだ？」
「この隣のレグナザードっていう国で聞いたぜ？ 『霸王の卵』でとんでもない力を手に入れたヤツがいるってな。どんなヤツか拝みにわざわざ来てやったんだ。もったいぶらずに教える」

レグナザードに行ったのか！

確かに、あの四將軍たちにはオレの力を見せた。それは、いちいち『霸王の卵』のことで狙われるのは面倒だから、もう使ってしまったて手元にはないということにしたからだが、それでも確かめに来るとは……

というか、レグナザードの將軍たちがこんなにあつさり情報を漏らすなんて想定外だった。

『霸王の卵』は極秘にしたい存在のはずだ。それをこんな男に簡単に教えてしまうなんて、にわかには信じられない。もしかして、レグナザードで何かあったのか？

『霸王の卵』についてはどうするか……やはり使ってしまったことにしたほうが、今後狙われずに済む気がする。オレという最強の存在がいることで、何かの抑止力になるかもしれないな。

「……『霸王の卵』はオレが使った。だからオレは世界最強になっている。君はそれを聞いたうえで、何故ここに来た？ そもそも、よくこの情報を教えてもらうことができたな？」

オレは疑問に思ったことを訊いてみた。

「なんだ、強くなったつてのはお前なのか。どんなヤツが『霸王の卵』争奪戦を勝ち抜いたのかかと思つたが、なるほど異世界人のお前なら納得だぜ。ちなみに、教えてもらったんじゃないって、偉そうな將軍どもを叩きのめして無理やり吐かせただけだな」

「レグナザードの將軍たちを叩きのめした？ 彼らは『魔喰人』^{バルバロイ}で、そう簡単に勝てる相手じゃな
くぞら」

デルピアドという男が使役していたドラゴン三体はオレが倒してしまったので、恐らく現在ドラゴンはいないだろうが、『魔喰人』としての身体能力だけでも、通常の人間では到底太刀打ちできないような強さがある。老体のシンという將軍ですら、かなりの力を秘めていた。

ゾンダール將軍でも彼らに勝つことは簡単じゃないだろう。それをこの男が倒したというのか？ 『魔喰人』……？ よく知らねえが、そういう変な能力を持つてたな。しつこく抵抗しやがったから、情報を聞き出したあと皆殺しにしてやったぜ」

「み、皆殺しだつて!? じゃ、じゃあレグナザードは……!?!」

「ああ、オレたち異世界人が奪つて支配した。あの程度の国、オレ一人で制圧できたぜ。言つておくがほかにも国を落としていて、すでにウインガリア帝国もオレたちの支配下だ」

「なんだとっ!?」

じつと話の成り行きを見守っていたゾンダール將軍が、驚愕の声を上げた。

「バカなつ、帝都メギドラには猛将グレンダス將軍と大魔導士エレンティスタがおるはず!? 優秀な青龍十騎士や白鳳魔導隊もおる! そう簡単に落とせるはずが……」

「あんなヤツらぶつ殺すのは朝飯前だつたぜ。まあ皇帝には逃げられちまったがな」
帝国が侵略された!? ウソだろ?

オレだつて帝国の戦力は知っている。大勢のエリートで構成された特殊部隊もあつたはずで、たとえ数力国が協力して攻め入つても、まず負けることはないくらいに帝国は飛び抜けた軍事力を

持つていた。それを簡単に落とすなんて……やはり黒髪には特別な力があるつてことか!?

「ま、そういうわけで、この世界はオレたちが支配させてもらうが、『霸王の卵』で最強になったヤツつてのが気になつてな。『そいつには絶対に勝てねえから世界征服は諦める』……レグナザードの將軍たちがそう言いやるから、その強さを味わいにここまで来たんだが、同じ黒髪ならあえて戦う必要もねえ。オレたちの仲間になれよ。一緒に世界を征服しようぜ」

黒髪の男は、オレを仲間に取り入れようとしてきた。が、そんな誘いに乗るオレじゃない。

「申し訳ないが断る。オレは黒髪だが、異世界人じゃない。この世界の住人だ。だから異世界人がこの世界を侵略するというのなら、抵抗させてもらう」

「ほう……お前のためを思つて誘つてやったのに、意外と頭が悪いな。まあいい、なら当初の目的通り、最強になつたというお前の強さを味わわせてもらうぜ」

そう言いながら、男は殺気を出して戦闘態勢に入った。

「待てリユーク、其奴の相手はワシがする」

オレが黒髪の男との戦いに入ろうとしたところ、ゾンダール將軍が後方から待ったをかけた。

「ウインガリア帝国のグレンダス將軍は、ワシが最も尊敬する人物。老いにより力の全盛期は過ぎってしまったが、まだまだワシですら及ばぬ強さを持つておつたはずだ。そしてエレンティスタ殿は、ラストイオンを超える世界最強の魔導士。世界に轟くこの最強の二人をもつても敗北した異世界人とやらの強さを、ワシが身をもつて確かめたいのだ」

ゾンダール將軍はそう言いながらゆつくりと歩いてくる。

そしてオレの横に並んだところで腰の剣を抜いた。ゾンダール將軍はグレンダス將軍や大魔導士エレンテイスタと旧知の仲のようで、彼らが敗北したことに強い憤りを感じているように見える。

「はあ!? なに勝手に決めてんだ、お前なんかオレの相手になるわけないだろ! 時間の無駄だ、引つ込め」

黒髪の男は戦闘態勢を一度解き、呆れ顔で將軍を小馬鹿にするような仕草をした。

男に言われるまでもなく、ゾンダール將軍でも分が悪いと感じる。尊敬している人物を侮辱されて憤る気持ちは分かるが、しかし、この異世界人は危険だ。

「將軍、本気ですか? かなり危険な相手ですよ?」

「危険は承知の上だ。リユークよ、おぬしはこの世界の切り札、安易に力を見せるべきではない。よって、まずワシが彼奴の力量を測ってやる。もしもワシが簡単に敗れるようなら、おぬし以外では異世界人には敵わぬという証左にもなるだろう」

オレが將軍の身を案じると、そんな心配を払拭するかのようになり、將軍は微笑みながら力強い言葉を発した。

將軍の決意は固いようだ。それに、確かに將軍の言うことには一理ある。

不安は拭えないが、ここは將軍の気持ちを汲むべきなのかもしれない。

「……分かりました將軍、でも気を付けてください」

オレはしばらく逡巡したあと、將軍に任せることにしてこの場から離れた。すでに周囲の人たちは大きく下がって、戦いの場は出来上がっていた。そこにオレも合流し、この戦いを見守ることに。オレは闇を呑む者や呪われし超越者などの強敵と戦ったことで、現在はゾンダール將軍よりも遥かに強くなっているが、ほんのちよつと前までは到底オレが敵う人じゃなかった。

単純な戦闘力ならオレのほうが高いが、將軍は『スマホ』の力に頼っているオレなんか足元にも及ばない、卓越した戦闘センスを持っている。一国の將軍としてぐり抜けてきた修羅場の数も違う。

いくら異世界人でも、そう簡単には將軍に勝てない……と思いたいところだが……

「ワシはアルマカイン王国第二十八代將軍ミエルニクス・ゾンダール。異世界人とやら、剣を交える前におぬしの名を聞いておこう」

「おいおい、本当にオレと戦う気なのかよ。仕方ねえ、準備運動代わりに相手してやるか。オレは新宮斬也、この世界の神から特別な力を与えられた人間だ。だから絶対に負けねえんだ、覚えとけ」

そう言いながら、新宮斬也という男は改めて戦闘態勢に入った。

彼は軽装ながら、オレでも作り出せないレベルの魔導装備を身に着けていた。手に持つ剣も聖劍級だ。あれほどの魔導装備なんて、簡単には見つからないぞ。

もしかして、異世界人の仲間に、オレと同じように魔導具を作り出せるヤツがいるのか?

「異世界の使者新宮斬也、ワシの剣を受けてみよ！」
將軍は手に持つ『聖劍・星閃く大劍』を眼前に掲げたあと、ひと呼吸置いて相手目掛けて駆け出した。

さすが將軍、凄まじい速さで一気に距離を詰めるが、新宮斬也という男は何故か棒立ちのまま、まるで動こうとしない。なんだ？ いったい何をするつもりだ？

と考える間もなく將軍は接近し、『聖劍・星閃く大劍』を振るった。

これは……もはやまともに躲ける間合いじゃないぞ!? 防御も間に合いそうにない。

新宮斬也という男、將軍の力を侮って墓穴を掘ったか？

ゾンダー將軍は躊躇せず相手の首を狙い、その劍先はそのまま首を斬り落とした……ように見えた。

だが、劍が斬ったのは新宮斬也の残像だった。

劍先が首にあと数ミリと迫った刹那、新宮斬也は瞬時に最高速まで加速してそれを躲したのだ。

新宮斬也という男のギフト『雷光の勇者』とは、どんな生物よりも速く動ける能力らしい。速いということは『スマホ』で解析したときに分かっていたが、まさかここまで高速だとは……

オレの目はかろうじて動きを追えたが、將軍にはまるで見えなかっただろう。

その証拠に、新宮斬也は將軍の背後に回って、劍を首元に突きつけていた。

「おっさん、オレが本気ならアンタの首は十回落ちてるぜ。手加減してもオレはこのスピードで動

ける。五秒でこの全員を殺すことだって可能だ。オレの強さを理解したか？」

「ば……バカな、このワシがこうも軽くあしらわれるとは……」

異世界人がここまで強いとは、さすがの將軍も想定外だったようで、顔面蒼白となって大量の汗を噴き出している。

なるほど……このスピードで動けるうえに強力な魔導装備まで着けているのでは、レグナザードの將軍たちが太刀打ちできなかったのも頷ける。異世界人が全員これほどの能力を持っているのなら、さつき將軍が危惧した通り、オレ以外は異世界人の相手にならないだろう。

「さあて、前座は終わりだ。こうなりやさすがにお前が相手してくれんדר? 『霸王の卵』で最強になった力つてのをオレに見せてくれよ」

新宮斬也が不敵な笑みを浮かべながら、劍先をオレに突きつける。

「お前は『霸王の卵』とやらで少しは強くなったようだが、オレたちのように異世界人じゃねえのなら、しよせんはこの世界の住人。オレとの格の違いを思い知れば、さっきの返事も変わるだろ。

同じ黒髪同士で争うなんてバカらしい、オレが勝ったら手を組もうぜ」

新宮斬也は再びオレを誘ってきた。

「……いいだろう。もしもオレが負けたら、君たちの仲間になるよ。オレはリユーク・ヴェルシオン、この世界で生まれ育った一人として、まずは彼方からの侵略に抵抗させてもらう」

意固地に断つてもよかったが、ここは承諾しておくことにした。完全に拒絶するより交渉の余地

を残したほうが、異世界人たちが態度を軟化してくれるかとも思ったからだ。

まあ絶対に負けない自信があるからこそ言えることでもあるが。

「おっしゃ、少しは物分かりがよくて安心したぜ。んじゃありユーク、自由にかかってきていいぜ。そんでオレの力を知ったら素直に言うこと聞けよ？」

新宮斬也は余裕^{しんやん}の態度で、オレに先制攻撃を譲った。

「じゃあ遠慮なくオレから攻撃させてもらうが、本当にいいんだな？」

「くどいぜ！ さつさとかかってきやがおがあっ！」

新宮斬也が言い終わる前に、オレは電光石火で接近してヤツの顔面を殴った。

もちろん手加減してやったが、新宮斬也は完全に不意を突かれたせいか、後ろにぶっ飛びながら一回転して起き上がる。

「こ、この野郎……人が喋ってるときに殴りやがって……！」

「いや、君がかかってきていいと言ったんじゃないか」

「ちっ……まあいい、今のはうっかり喰らっちゃまったが、二度とオレには触れられねえげぶっ！」

オレはまた神速で彼に接近し、もう一度顔をぶんどる。

新宮斬也はまるで反応できず、さつきと同様に軽く吹っ飛んだあと体勢を整えた。

「こ……こいつ……！ なるほど、確かに弱くはねえな。腐つても黒髪つてことか。オレとしたことが、お前のことをちっとナメすぎたらしい。いいぜ、ここからオレは本気だ。もうまぐれ当たり

はねーぞ、オレの力を思い知りやがおばああっ」

再びオレは新宮斬也に接近し、同じようにまた殴った。

「こっ、この野郎っ！ こっちが手加減してやりやあいい気になりあばっ、ばべっ、ぶぎっっ！」

逃げようとする新宮斬也を簡単に捕捉し、その顔を二発、三発、四発と連続で殴っていく。新宮斬也はオレのパンチをまったく避けられずに、ただひたすらボコボコに殴られ続ける。

「バカなっ、オレより圧倒的に速くて全然避けられねえっ！ ……いや、そんなわけねえ！ オレはこの世界で最速の力をもらったはず、オレの本気には誰もついてこれるわけがねえんだ！」

新宮斬也は、恐らく持っている最大の力を解放して、超速でオレの背後を取ろうとした。

しかし、オレはそれを超えるスピードで反応し、逆に新宮斬也の背後を取った。

「ウソだ……オレより速い人間なんているわけがねえっ！ そういう能力をもらったはずなんだ！ ちくしょう、神のくせにあいつウソつきやがって……『霸王の卵』のほろがっえーじゃねえか！」

新宮斬也はオレに背後から剣を突きつけられて、絶望の声を搾り出す。

確かに、『雷光の勇者』はこの世界では最速能力を持つギフトだ。だが、コピーしてオレも『雷光の勇者』を取得させてもらった。そのうえ、オレの『素早さ』スキルは最高ランクの(神)まで成長しているし、『韋駄天』というスピードに特化したギフトも持っている。

これらを全て並行発動したときの速さは、新宮斬也の比ではない。

「いいや、オレは認めねえ！ オレが最速なんだ！ お前は何かの術でオレを惑わしてるだけに違

いねえっ！ オレの真の力を見せて……」

「新宮斬也、君はもう動くな！」

オレがそう命令すると、動き出そうとしていた新宮斬也の体がビタリと止まった。彼はなんとか手足を動かそうとするが、プルプルと全身が震えるだけで、そのままの姿勢で硬直している。

「ど、どういことだ!? 指一本動かせねえっ！ オレ……オレの体があっ！」

新宮斬也が動けないのは、オレが魔公爵アシユタローダの能力『魔王の囁き』^{デモンズワード}を發動して彼の体を支配したからである。確実に効果があるわけじゃないが、オレと彼の力量差なら通じたようだ。

オレは新宮斬也の真正面に立ち、首元に剣を突きつける。

「勝負あったな？ だからオレは最強だと忠告したのに、本当に聞く耳を持たないヤツだ。さて、君のことはどうしようか？」

動けない新宮斬也に対し、オレはわざと意地悪く話しかけた。

異世界人たちはどうも怖い物知らずみたいなんで、その無鉄砲さを少しは反省させたいところ。

「おーいリユーク、こういう危険なヤツにはとどめを刺すのがセオリーだぞ。情けは無用だぜ？」

少し遠くでこの戦いを見ていたザックが、からかうように発言した。もちろん、これは冗談だ。だが新宮斬也は本気にしたようで、恐怖で顔を真っ青にしながら命乞いを始めた。

「ま、待って、待ってくれ！ 黒髪のお前には、多分オレたちと同じ血が流れてる。何故お前だけ十八年も前にこの世界で生まれたのか分からないが、オレたちの仲間のはずなんだ！ だから頼む、

殺さないでくれ……！」

新宮斬也があまりにも怖がっているので、ちよつと脅かすすぎたかもとオレは反省した。

彼を殺したら、異世界人との対立は深まるだけだ。なんとか共存する道を探らないと。

「安心してくれ。君は殺さない。ただ、仲間のもとに帰ったら、この世界の侵略を諦めるように伝えるんだ。どうしても敵対するというのなら、このオレが相手になる。いつでも何人でもかかってくるがいい。分かったか？」

「ああ、ああ、分かった、仲間に伝える！」

新宮斬也は動けない体で必死に首を縦に振ろうとする。

あ、あと一つ気になったことを聞いておくか。

「君たちに力を授けたという神様だけど、それはどんな外見をしていた？」

「えっ？ いや、普通のおっさんみたいな感じだったが……？ 一応偉そうに輝いてやがったが、変な外見じゃなく、オレたちと同じ人間のような姿だったぜ？」

おじさん？ っていうと中年の男性みたいな姿か？

異世界人たちが会った神様の姿を知りたかったのは、オレの記憶にある神様は女性だった気がするからだ。

この世界で信仰されている神様は初老の男性というイメージになっているので、何故オレが女神様と会ったのか少し不思議に思っていた。ただ、異世界人たちが会った神様が中年男性の姿なら、や